

2024/05

いつ始めても
遅すぎることはない。

「考える経営には 恩恵がある。」

EAT ビジネス予備校の研修で、過去 8 年間ほぼ毎月福岡の地に立ってきた。
いつも飛行機を降りた途端に、空港や町が活気であふれ人の表情が生き生きしているを感じる。



先日タクシーに乗ったら、昨年の値上げ効果で、年収が 5 - 6 百万円まで急増したと嬉しそう。日本の人口は 2005 年頃から減少に転じたが、福岡市の人口減少開始時期は 2035 年から 2040 年まで先延ばしされている。考える経営には恩恵がある。

先日若手の生徒に、「バブル時代に日本ってどんな様子だったのか？」と質問された。振り返れば、仕事量が人口の伸びを上回って増え続けるので、いつも忙しかった。給与はうなぎ上り。若くしてたくさんの仕事を任せられ（やらされ）、失敗しても“次回はしっかりやれよ！”とチャンスを貰えた。自己肯定感を持ちやすかった。

活気にあふれた環境は気持ちを前向きにさせる良薬だ。一方で思考停止の麻薬にもなる。

TSMC の熊本進出により、アルバイトの時給 3000 円がセンセーショナルに報道されている。熊本における電子部品等製造業の最低賃金 940 円を考えると、日本人目線では“破格”の厚遇だろう。でも、EAT の皆さんには、給与を支払う側の感覚を、ぜひ想像して欲しい。過去 30 年の名目賃金の変化を見ると米英の約 2.7 倍上昇に対し、日本は 1.1 倍だ。3000 円をざっくり 2.5 で割って 1200 円ぐらいの感覚で支払っていると思えば分かり易い。世界展開しているグローバル企業の定めた日本人の労働に対するプライシングは、目線を高めれば違って見えてくるはずだ。

私が処遇の価値を考えることにこだわるのには理由がある。

外資に移って処遇が少しあがった時にはとてもワクワクした。長期デフレの日本で昇給から縁遠かったのも、素直に嬉しく、自分が高く認められた気がした。でも、数年して社長になると、世界他地域に比べて日本は拠点成果の割に処遇が低いことに気がついた。それからは、日本の社員のために、実績に見合う処遇を獲得する戦いが始まった。私には日本流“倫理観”が染みついていたから、“金ももっと欲しい！”とは正直思わなかった。ただ、物言わぬ日本人が黙々と生み出す利益が他地域に流れる様がショックだった。黙って働くだけの存在になるのが嫌だった。見合った対価を適切に獲得できるようになった時に、初めて「世界の対等な一員になった誇り」を手に入れた。

あなたの給与は、働きに見合っているのか？過大か、それとも過小か？

仕事ができる人財でも、自身の処遇に関わると急に感情論に陥ってしまう。久しぶりに物の値段が上がった今、“自身のプライシング”にこそ敏感になってほしい。いくら利益創出に貢献し、いくら受け取るべきか？自身の報酬金額の適否を論理的に考える姿勢や目線を持てば、会社主導のジョブ型雇用や実力主義の人事制度改革を形倒れに終わらせず、成果に紐付ける意識が自ずと高まっていく。海外企業の論理や外国籍人財の思いを深く理解する助けにもなる。時にはしっかり稼いだ金を社会貢献に使えば、生きる手ごたえ、すがすがしさも味わえるはずだ。

本日寄稿くださった長崎社長からは、“守るべきものを守り、変えるべきを変える”経営者の覚悟と環境適合の姿勢を学ばせて頂いている。名古屋の企業が連携して外国人留学生を応援する仕組みも、同氏の Cool Head Warm Heart から生まれたもので感嘆する。

「あついおmoi」

ナガサキ工業株式会社
代表取締役
一般社団法人グローバル愛知
代表理事

長崎 洋二 氏



ナガサキ工業は1935年に金物商として創業し、戦後からは電力会社向けの高圧送電線用架線金具の製造を主な事業としてきました。発電所から変電所へ電気を届けるため、送電鉄塔に取り付けられる特殊な金具です。

私が入社して33年、倒産の危機、新規事業立ち上げ、産産連携などさまざまな経験をしました。その原動力は常に「あついおmoi」だったように思います。

1、倒産の危機

いながらなんでも生き残る、高度経済成長期には日本全国に送電網が張り巡らされ、架線金具の需要も拡大していったようです。しかしある程度普及してしまうと金具のニーズは頭打ちになります。

私が入社し数年が経った1990年代半ば、売上の大半を電力事業に依存していた当社は倒産の危機を迎えることになりました。バブル経済がはじけ日本全体が不況に苦しむ中、会社存続をかけ必死で新規客先を探しなんとか倒産の危機を免れたわけです。

「世の中の商品やサービスはすべて商品寿命があり、同じことだけをやり続けていればいつかニーズはなくなる」ということに気づかされました。それが「中小企業の生き残る術は多角化」という考え方になり、やがて、フォークリフトなどの産業車両用部品や自動車用センサー、物流機器、ソーラーパネル用架台なども手がけるようになりました。

2、中小企業者としての自負

「下請け気質を打ち砕け」日本の企業の99.7%が中小企業であり、およそ70%の人が中小企業で就労しています。中小企業は日本の作業の根幹を支えていると思っています。中小企業者は、「中小企業としての自負」を持つべきだと思っています。得意先の言いなりになるのではなく、対等かつ重要なパートナーとしての立場を確立すべきだと思います。ひとつの業界や得意先に依存せず、自社の強みをしっかりと認識することが重要だと思います。

3、産産連携事業

100年に1度のチャンス、リーマンショックの時、多くの企業が100年に1度といわれる不況に苦しんでいました。当時まだ注目されていなかった「環境」に焦点をあて、中小企業が強みを持ちより産産連携スキームをつくりソーラーパネル付きフェンスやLED、ミスト装置などの商品開発をしました。この取り組みは当時注目を集め、愛知県環境賞を受賞しました。

この産産連携をきっかけに太陽光発電事業を立ち上げ、現在はグループ会社で太陽光発電所の設計・施工・保守管理を行っています。

4、少子高齢化の日本

「中小企業と留学生の課題解決」日本では、2030年までに生産労働人口が640万人も不足するといわれています。中小企業にとつて今後ますます人材不足が加速するでしょう。一方で、漫画やアニメなど日本のことが大好きで、日本での就職を希望する留学生の半数以上が、さまざまな要因で夢がかなわず帰国せざるをえないという現実があります。一般社団法人グローバル愛知を仲間の経営者と共に立上げ、「中小企業の人材不足の解消」と「留学生の就職率の向上と定着」をミッションとして活動しています。

留学生たちが、大好きな日本で就職し、定着し、活躍し、納税し、日本のメンバーとして消費もする。そんな社会を目指すべきだと思っています。

B-EAT ビジネス予備校のOB/OGによる地域を超えた繋がり

本年度の各クラス代表幹事による幹事就任および所信表明



B-EAT 東京 代表幹事

弓削 正樹 さん (写真左)

EAT ビジネス予備校 東京クラス9期生

※(写真右) 同期で幹事の一人である岡本さん



B-EAT 福岡 代表幹事

小石原 隆史 さん

EAT ビジネス予備校 福岡クラス7期生

東京クラスの代表幹事に就任しました弓削と申します。東京9期は私含め7名の幹事で活動していきます。B-EATのメンバーは、EATの歴史とともに増え続け、現在では300名規模にまで拡大しました。この大きなネットワークを活性化できるかどうか、幹事次第であると思っています。重責ですがB-EATメンバーの今後のビジネスに繋がる、「燃える取組み」を展開したいと考えていますので、今後ともよろしくお願いします。

皆様初めまして。福岡クラスの代表幹事を拝命致しました小石原と申します。福岡7期では、16名の仲間と1年間学びを深めて参りました。EATで身に着けた「深く考え抜く」という視点は、私たちが混沌とした世界の中で、主体的に未来を創造する為の唯一の方法だと感じております。これからは、B-EATを通じて卒業された先輩方や講師の方々と協力しながら日本の未来を創造できればと思っております。引き続きご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。